

様

年 月 日

EC（エピルビシンとシクロホスファミド併用）療法

この治療では次の2種の治療薬を使用します。

エピルビシン（ファルモルピシン注）：細胞の遺伝子（DNA）の機能や合成を妨げ効果を現します。

シクロホスファミド（注射用エンドキサン）：細胞の遺伝子（DNAやRNA）の合成を妨げ効果を現します。

＜投与スケジュール＞ . . . 3週間 1コース

今回 コース目

		1コース目		2コース目
＜薬品名＞ ＜投与方法・時間＞	＜薬の作用＞	1日目	22日目
		／	／
デキサト注・グラネト注 ＜点滴静注30分＞	嘔気・アレルギーの予防		休薬	
エピルビシン 生食100ml ＜点滴静注15分＞	化学療法剤		休薬	
エンドキサン 5%ブドウ糖250ml ＜点滴静注30～60分＞	化学療法剤		休薬	

＜薬剤投与日の注意＞

- ★ 点滴部位が痛くなったり、腫れたりした場合や点滴が落ちなくなった場合は、薬液が血管外へ漏れていることがありますので、すぐに申し出てください。
- ★ 薬剤による治療は、血液検査など必要な検査を行い、治療効果、副作用を確認しながら進めていきます。副作用の発現・合併症の有無によって、治療の途中でも薬剤の減量・変更や中止されることがあります。

＜備考＞

< E C 療法の副作用 >

副作用と症状	発現時期、頻度	対策	メモ
白血球減少 発熱 風邪様症状	1～2週間	うがいや手洗い・休養を心がけて下さい。白血球を増やす薬や抗生物質を使うこともあります。	
血小板減少 出血	—	けがや打撲、歯ぐきからの出血、鼻血などに気をつけて下さい。止血剤や輸血をすることもあります。	
貧血 倦怠感、息切れ めまいなど		採血結果によっては、造血剤の使用や輸血を行います。	
心筋障害 疲労感、動悸、息切れ 喘鳴、むくみなど	ファルモルピシンの総投与量に関係	定期的に心電図などの検査を受け早期発見に努めてください。	
出血性膀胱炎 尿が濁る、尿量が減る 血尿、下腹が痛いなど	2～3日後	水分の摂取に心がけて尿量を増やしてください。必要時には輸液などを行います。	
吐き気・嘔吐	投与中～ 重度4～5人に1人	我慢せずに吐き気止めを使用してください。	
口内炎		うがい薬や塗り薬を使います。	
脱毛	2週間～	治療が終了すれば徐々に回復します。気になる方は帽子やスカーフ・かつらなどをお使い下さい。	
血管痛・静脈炎	投与中～	痛みや腫れがあれば、すぐに申し出て下さい。	
下痢・腹痛	—	水分摂取を心がけて下さい。下痢止めや整腸剤を使ったり、点滴をすることもあります。	
その他：過敏症、肝障害、腎障害、肺障害、倦怠感など			

- ★ ファルモルピシンの系統の薬は、治療を継続し、投与量が一定以上を超えると心臓への副作用が強まるものが報告されています。一定以下の投与量でも注意が必要です。定期的な心臓の検査を受けるとともに、上記のような症状があればすぐに申し出てください。
- ★ ファルモルピシンは尿中に排出され、尿が赤くなることがあります。(ファルモルピシンは水に溶けると赤い色をしています)
- ★ 腎障害や出血性膀胱炎の予防のため、水分摂取に心がけてください。
- ★ ここにあげた副作用は、代表的なものです。必ずしもこれらの症状が現れるとは限りません。もし副作用が現れても、早期に発見、対処すれば、治療の継続が可能です。過剰に心配せず、気になること、調子の悪いことがあれば、医師・薬剤師・看護師にお知らせ下さい。